

I・社会的背景

・光害

近年、都市化の進行により、街は夜でも明るく照らされ、星が見えにくい環境が広がっている。「光害」・良好な「照明環境」の形成が、漏れ光によって阻害されている状況、またはそれによる悪影響を「光害」と定義する。環境省：光害対策ガイドラインにおける光害の定義 p1
特に都市部ではこの問題が顕著で、肉眼で確認できる星の数が大幅に減少している。アメリカ国立光赤外線天文学研究所のプロジェクトでは、2011年から2022年にかけて、夜空は毎年 9.6% ずつ明るくなっていることが分かった。このままでは、いつか見えていた星も見えなくなる日が来ってしまうだろう。

・SNS

SNSや映像メディアが発達した現代において、「体験の記録」や「共有」は人々の行動や価値観に大きな影響を与えている。星空を見に行くという行為も、かつてのように静かに空を見上げる体験だけでなく、「写真を撮ること」や「特別な場所にいる自分を発信すること」が目的の一部として加わる場面も見られるようになった。その結果、体験そのものよりも、他者に向けた表現や評価が意識される傾向が生まれていると考えられる。こうした状況の中で、他者に向けて発信されることを前提としない体験や、その場に身を置くこと自体に価値を見出す空間は、現代において改めて意義を持つのではないだろうか。

・時代

近年、タイムパフォーマンス（タイパ）という概念が社会的に広く浸透している。タイパとは、費やした時間に対してどれだけの効果や満足度を得られたかを重視する考え方であり、特に SNS の普及とともに、Z 世代を中心として強く意識されていると指摘されている。このような価値観の広がりは、成果や効率、スピードを重視する社会構造と深く関係していると考えられる。その結果、人々は常に何かをしていなければならない、結果を出さなければならないという意識にさらされ、立ち止まる時間や感覚を持ちにくくなっている。

V・対象敷地

星の見えやすさ指数の高い県と日食観測エリアの合わさる地域を全国から8つ選定し、その中から第一号店として長野県阿智村を選定した。

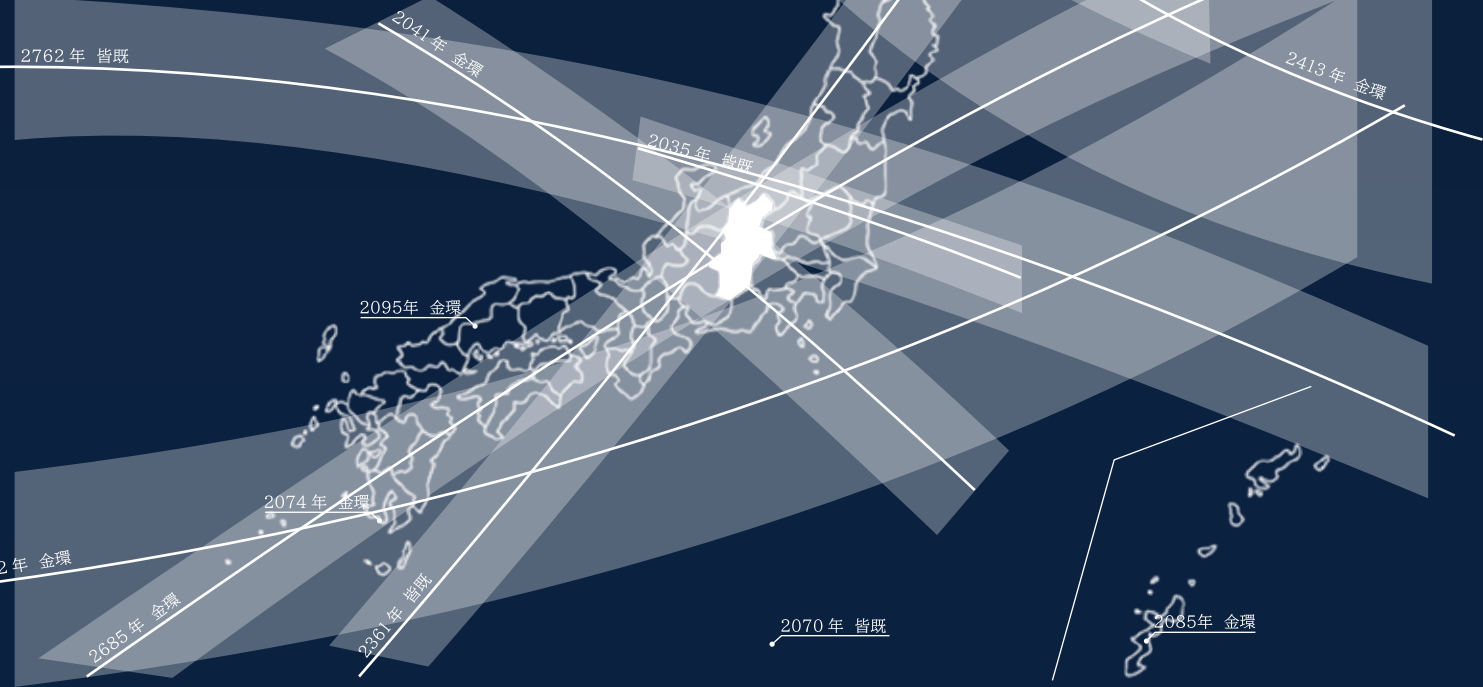
星の見えやすさ指数（mag）
夜空明るさを示す単位「等級【mag/□”】マグニチュードパー平方秒角」を用いる。
夜空の明るさの評価は、国際ダークスカイ協会による金銀銅の分類における星空の見やすさに関する客観的な評価分を参考とする。
金 21.57 以上　銀 21.74 ～ 21.00　銅 20.99 ～ 20.00 環境省 デジタルカメラによる夜空の明るさ調査の結果について参照

選定地域

県	市・町・村	mag			
北海道	川上郡弟子屈町	21.4mag	三重	亀山市	20.0mag
宮城	登米市	20.1mag	高知	芸西村	21.2mag
東京	神津島	21.2mag	岡山県	井原市	21.3mag
長野	阿智村	21.2mag	熊本	南阿蘇村	21.4mag

日食観測エリア

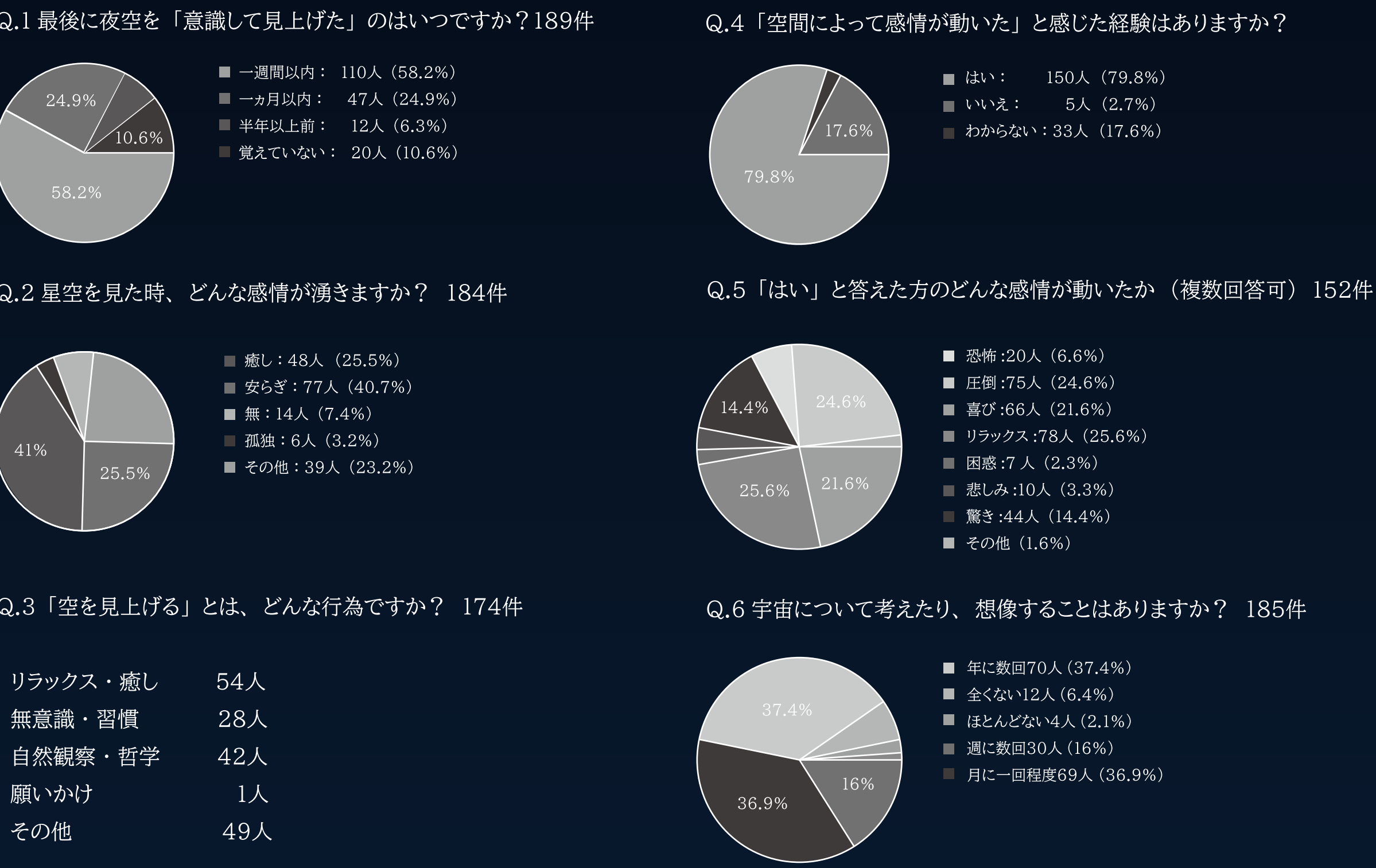
日本で見られる現象に限定する
2030年～2762年の間におこる
日食エリアを算出



2030 年	金環	北海道
2035 年	皆既	上越・関東
2041 年	金環	中部・近畿
2063 年	皆既	東北
2070 年	皆既	太平洋沖
2074 年	金環	九州
2085 年	金環	沖縄
2089 年	皆既	宮古島
2095 年	金環	中国
2312 年	金環	太平洋地域
2361 年	皆既	近畿・四国
2413 年	金環	北海道
2685 年	金環	本土全域
2762 年	皆既	関東・中部

II・星空調査

長岡造形大学の学生・職員を対象に、星空に関するアンケート調査を実施した。現代を生きる人々が日常の中で夜空を見上げているのかを明らかにするとともに、 星空や空間によって感情が動いた経験があるか、またその際にどのような感情が生まれたのかを把握することを目的としている。



調査結果

本調査より、多くの人が一週間以内に夜空を見上げており、星空は想像以上に身近な存在であることが分かった。ただし本調査は造形大生かつ星が美しい長岡という地域特性による偏りの可能性も考えられる。星空に対しては「安らぎ」「癒し」といった正の感情が多く、負の感情を和らげる存在として認識されている一方、「恐怖」「孤独」を感じる人も一定数存在した。空を見上げる行為はリラックス目的が多く、日常的行為から想像的行為まで幅広く受け入れられている。また、約 8 割の人が空間によって感情が動いた経験を持ち、自然空間では包み込まれるような安心感、人工空間では圧倒や高揚感が多く見られた。宇宙に対しては興味を持つ人が多いものの、「未知」「怖い」など負の印象が増え、光による美しさを超えたスケールに人は恐怖を感じるのではないかと考えられる。

III・研究目的

本研究の目的は、「星空を見上げる」という行為を通して、人々が自分自身と向き合えるような空間を提案することである。
星空を「外に向けて発信する対象」ではなく、「自分自身と繋がるためのきっかけ」として再構築を行う。
そして、光害や情報過多といった社会的背景の中でも、人がふと立ち止まり、感情や感覚に身を委ねることができる、そんな空間のありかたを建築的に模索する。

現地調査

長野県・阿智村
総人口 5700 人
面積 214.43km²
対象敷地 標高1400m ヘブンスそのはら イワナの森一角
長野県下伊那郡の西部に位置する村
2006 年に撮影された浪合地区もみじ平天文村で撮影された星空写真が環境省主催の「全国星空継続観測」において夜空の明るさが 23.7mag を記録し、「星がもっとも輝いて見える場所」として日本一の星空に選ばれた。
また、旧国鉄中津川線のボーリング調査中、突如お湯が沸きだし発見された昼神温泉があり、温泉街としても親しまれている。参照：Wikipedia/ 阿智村

調査日
2025 年 8 月 10 日（日） 撮影日 同日
調査場所はヘブンスすのはらのいわなの森の一角である。標高は1400mに位置し、麓の施設からロープウェイを使って約 15 分揺られながら頂上まで登る。そこからイワナの森まで 10 分程歩くと到着する。イワナの森はウォーキングコースがあり、道中には二つの池や木漏れ日の庭、水芭蕉の咲くエリアが点在する。一周 1 時間ほどかかるが周りは原生林に囲まれ夏でも涼しく歩くことができた。辺りは、自然に囲まれた空間で川のせせらぎや、鳥のさえずりなど自然を楽しむには十分な立地である。

